第48回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール

文部科学大臣賞　作品

文部科学大臣
最優秀賞

5年・自由図書部門／読んだ本―夏の庭

「死」が怖いのはなぜ？

兵庫県神戸市立本山第一小学校　米倉　沙和香

夏休みに入ってすぐ私は書店に行き、夏休みの読書のための本を選んだ。この本はその中の一冊で、表紙の少年たちの雰囲気と「夏の庭」というタイトルにひかれて真っ先に読みはじめた。ところが、読み進めると想像とは全く違い、正直なところ何度か読むのを途中でやめようか、と思うほど不快な気持ちになった。三人の少年が「人の死を見たい」という興味から、死にそうなおじいさんを観察するという、ともすればおじいさんの死を願うかのような行動に怒りを感じたからだ。それでも最後まで読み続けたのは、私自身も葬儀へ参列した経験はなく、死者を見たことがなかったからかもしれない。だから、「死」に対して恐怖であったり、自分はもちろん親しい人に決しておとずれてほしくないもの、くらいの漫然としたイメージしかもっていなかった。もしかしたら、「死」がどんなものか知ることができるかもしれない、という思いがあったかもしれない。

ところが、おじいさんはどんどん元気になっていき、三人の少年の行動について不快よりも不思議に感じることが増えてきた。三人はゴミを片付け、庭にコスモスの種をまき、家の修理をはじめたのだ。私も、夏休みの手伝いは「ゴミ捨てをする」と決めていたが、これがなかなか大変な作業だった。家じゅうのゴミを集めて、分別して捨てに行く。燃えないゴミはなかなかの重さで、ゴミステーションまで運ぶと汗だくになる。一言で「ごみ捨て」と言っても、結構な体力を要する。それが庭中に溜まったゴミともなれば重労働だったに違いない。庭の草取りをする場面もあったが、夏の元気な雑草を抜くのはかなり力がいるし、ずっとかがんだ姿勢で作業することの大変さも知っている。それなのに三人は文句を言いながらも、最後までやり遂げるのだ。もう、目的は全然違っている、と言える行動ではないかとおどろいた。変わったのは目的だけではない。見ている立場が逆転しているのだ。おじいさんが三人のことをよく見ている。見守っているという方があっているかもしれない。会話の内容も、相手のことを考えているからこそ言える内容にかわり、ただの近所さんを超えた信頼関係が生まれてきているとさえ感じさせる物語だった。

読み終えた時、私の「死」に対する考えは変わっただろうか。間違いなく「死」というものを深く考えるきっかけになった。恐怖を感じていた理由は、まず「死」がよくわからないものだからということ。これに関しては本の中でも「わからないってことが、こわいのモトなんだよ」と言っていた。全くその通りだと思った。だから、私も「怖い」とか「嫌だ」などと感じることこそ目をそむけてしまわず、より深く知ろうとすることが大事だと考えている。もう一つ、「死」によって、世の中から自分の存在が無くなってしまうことへの恐怖だということにも気付かされた。自分の存在だけがないまま、それでも世の中は全く変わることなく、日常が続いていく。想像しただけで、怖くて胸が苦しくなる。けれど、この本を読んで、そうではないのかもしれないということも分かった。三人の少年がおじいさんと過ごし、おじいさんと話したことを、これから先も忘れることはないはずだからだ。確かに自分の姿はこの世から無くなってしまうかもしれないが、自分が存在したという事実は多くの人の心の中に残ることができる。それに、もしかしたら、これから大人になり何か一つでも成し遂げることができれば、それも後々まで残っていくかもしれないのだ。「死んでもいい、と思えるほどの何かをいつかできるだろうか。たとえやりとげることはできなくても、そんなにかを見つけたい。そうでなくちゃ、なんのために生きているんだ。」という言葉があった。強烈に私を惹きつけ、今も私の頭から離れない言葉だ。やはり「死」は、今の私にとっても恐怖であり、私の周りの人たちの誰にもいなくならないでほしいという気持ちに変わりはない。けれど、生き物にとって「死」がさけられないものであることは、頭の中で少しは理解している。それならば、「このために生きていた！」と思えるようなものを何か見つけたい。そういうものを見つけて、できればやりとげたい。そして、自分が納得できる結果を残すことができたら、その時にもう一度「死」について感じることは変わっているのかどうか確認してみようと思う。